まえがき

「研究として『源氏物語』をどのように読むのか」というとき、いうまでもなく予めどこかに答えが用意されているわけではないし、こう読まなければならないという決まった読み方が、最初からあるはずもない。

とはいうものの、それではどのように読んでもよいかというと、確かに、どのように読んでもよいわけではあるが、ただ単に恣意的な読みを披露し、散漫な感想を述べるだけでは、『源氏物語』の研究としての読みに共感は得られないであろう。

なぜなら、何よりも私の読みに思わず知らず現代的もしくは近代的な基準による解釈が紛れ込む可能性があるからである。『源氏物語』が「読解至上主義」に陥ることを非難する向きもある。その危険性を回避し、私的な読みの暴走を抑制できるのは、注釈と隣接科学の成果を参照することであることは言うを俟たない。

ここに私の立場表明がある。つまり、『源氏物語』を「古代物語として読む」という立場である。そうであれば、『源氏物語』を「古代物語として読む」ために、どのような方法が必要となるのかが問われる。

このとき、読むということにおいて何が出発点になるのかというと、現存の伝本が鎌倉写本を遡れないという条件があるとしても、なお『源氏物語』が他ならぬ古代のテキストだということである、と私は考える。すなわち、恣意的に読むこと、近代的に読むことを糾し、学的に分析し批評しようとすると、どのような基準と方法とが必要となるだろうか。

ここで想起されるのが、増田繁夫氏の論文「古代的世界に生きる光源氏」と、「光源氏の古代性と近代性—内

面性の深化の物語―」[1]とである。

内容からみると、前者は後者の論考の要約かともみえるのだが、時間的前後関係からいえばそれは考えにくい。むしろ後者の方が、増田氏の考えは明確かつ論理的に示されている。したがって、ここでは後者の論を丁寧に追いかけてみよう。

私がまず魅かれたのは、論題である。すなわちこの論題は、光源氏に「古代性と近代性」を問うところに、「古代性」と「近代性」とを方法的な対概念として用いることの標榜があるとみてとれるからである。

まず増田氏は「主題」を求めることは可能かという問いから切り出し、「主題」という「近代的批評概念をもちこむことは適切か」という（三一一頁）。なぜなら、増田氏は「光源氏の人間性」について「一種の自己形成の物語というべき性格」があると見るからである。すなわち光源氏という「主人公」は「絶えず脱皮変身してより深い新しい世界に入りこんでいった」と捉え、光源氏が「つぎつぎと変貌してゆく姿にこそ、この作品の本質的な特徴がある」とみる（三一二頁）。言い換えれば「この作品全体」には「かすかにある種の統一的な契機の存在を予感させるところ」があり、それが「人々の内面性の深化」であるというのである（三一二頁）。

すなわち、増田氏が注目された点は、「内面性の深化」に近代性を見ようとするものである。いうならば「主人公」という概念も小説のものであり、まさに近代のものに他ならないであろう。とはいえ、増田氏のこだわるところは、この物語がどれくらい統一性、完結性をもつのかという認識であろう。すなわち、増田氏の説かれる主旨は、『源氏物語』はいわば緩やかではあるがひとつのテキストであるという理解である。

さらに増田氏は、光源氏が「古代帝王の色好みの伝統」に立つという従来の理解について、改めて物語内の

「色好み」の用例を確認し「源氏について「色好み」の語は用いられていない」ことを重視される。そして「色好み」に「好意的肯定的な傾向が明確になるのは、時代の下った中世の物語になってから」だといわれる（三一六頁）[2]。

さらに増田氏は「源氏と藤壺との関係」に対する「不義」「不倫」という評価に疑義を呈する。すなわち「当事者たち」が「そうした近代的な倫理意識とはかなり遠いところにいる」といわれる（三一六頁）。さらに、須磨巻において「自責の念、父に対して倫理的な悪を犯したという罪意識が、およそこの源氏には欠落している」といわれ、「源氏は、いまの自分の苦境を、藤壺に冷泉院を産ませたことの「応報」、あるいは父の妻を犯した「罪」の「罰」として認識している」とみる「通説」を批判される（三一九頁）。さらに「心のおに」を「良心の呵責」とする解釈も「近代人」のものであるという（三二一頁）。つまり、増田氏は一貫して「この物語の人々の世界にはまだそうした倫理は存在しなかった」（三二二頁）と主張されるのである。そして、

源氏はわれわれの時代からは遠い古代の人であり、さらにまたその古代においても、「物語の主人公」という特殊な条件をもつ人物でもあるから、異なった思惟形式をもっているかもしれないのである（三二四頁）。

といわれる。この「異なった思惟形式」とは何か、ここでは充分に展開されているわけではない。しかし後に、増田氏は若菜下巻における光源氏が、「天の眼（まなこ）」という表現が仏教語に由来するものとしつつ、

ここの「空についているかのような目」は、他に知られたくない自己の秘密が「見られる」ことをおそれる自分の心を、「天のまなこ」と外在化して感じ、幻視したものである。その点では、夫の夢に自分のあり方が見られたのではないか、と思った空蟬の「空おそろし」などと比べると、一歩古代性を脱却した、より一層深く内面化された思惟形式であろう（三三二頁）。

と述べている。この両箇所を考え合わせると、光源氏の中に古代性を認めつつ、新たに「内面化」の進んだ「思惟形式」が認められることを指摘されている。そして若菜下巻の柏木の思考は、すなわち「ただ人の源氏の妻に通ずることはそれほどの「罪」ではない」という理解が、「貴族社会に処してゆくことを困難にした、という自己の愚行をおかした」という意識に基づくという（三三四頁）。したがって「天のまなこ」は「古代人の自己中心的な思惟体系から一歩出かけていること」すなわち「自己のあり方を客観視し対象化する視点を獲得し始めたあり方」を認め、これが「極めて萌芽的な段階のもの」と評される（三三四頁）。

つまり、この理解は、光源氏における自己の「客観視」や「対象化」に古代からの脱却を見ようとするものである。

説かれるように、「罪と罰」という認識の枠組みこそ、まさに西洋近代のものであろう。一方、因果応報の意識は、若菜巻以降には明らかに働いていることが確認できるというべきであろう。古代の罪観念というもののありかたを再度問い直す必要を説かれることは、指摘されるとおりである。増田氏自身が、光源氏と藤壺とは「罪障意識は強くもちながらも、その罪障の自覚と一対をなすべき「懺悔」という贖罪法には無縁なあり方に終始する」（三三九頁）と指摘されるように、彼等の行動を断ずるにあたって、ないものねだりの「罪と罰」の枠組みではなく、仏教的な「罪障と懺悔」という枠組みを対照させておられることは重要である。

さて、増田氏の論考の興味深いところは、実はここから以降である。若菜巻における女三宮降嫁をめぐって、増田氏は、

源氏は朱雀院からの懇願を拒否できなかったという理由だけで女三宮をひきうけたのではなかった。宮が、単に飽かず思う藤壺ゆかりの女性だという具体的表層的な理由のみで、心を動かされたのでもない。藤壺や

女三宮への志向の背後には、高貴な血へのあこがれがあった。源氏の側にもまた、主体的でより内面的な深層からする動機があったのである（三四八～九頁）。（傍点・廣田）

と説かれている。増田氏も説かれるように、光源氏の深層には「高貴な血へのあこがれ」があることに、私も賛意を表するが、ここには「主体的」という近代的概念も用いられている。ここは自らの意志においてという意味かと思うが、私が関心をもつ点は、物語を分析するにあたって「表層」と「深層」という対概念を用いておられることである。さらに増田氏は、

破滅の危険を知りながら朧月夜に近づいたり、何としても藤壺を手にいれようとするそうした源氏の衝動は、所謂「王権」の概念によっても説明できる部分があるが、柏木の女三宮を得ようとする情念についてまでも、「王権」の概念を適用することはできないであろう。高貴な女を得ようとする衝動は、「王権」などよりもさらに深く広い人間性の基層にもとづくものであると考えられるのである（三五一頁）。（傍点・廣田）

といわれる。ここには「基層」という概念も加えて用いられている。

ことさら言うまでもないことであるが、もともと「王権」という概念は、物語を構成する原理的な枠組みを探ろうとするものであり、物語の「情念」を分析するための用語ではない。

いずれにしても、増田氏と同じ用語を使うものではあるが、私は、

新層／古層
表層／基層

というふうに、時間軸を入れた対照軸と時間軸を入れない対照軸とを交差させて座標軸を設定した方が明快ではないかと愚考するものである。

ただし、何をもって基層とし、何をもって古層と定義するか、またその論拠が何かについては、古代天皇制の確立に深く関与した神学の書である『古事記』や、歴史書である『日本書紀』そのものに神話を見るよりも、地誌である『風土記』の中に認められる神話の枠組みを、物語や説話、昔話の基層であり古層をなすものとみるという手続きをとりたいと考えるが、この議論の詳細は別に譲りたい。[3] そのとき、表層／深層という軸は、もう少し相対的なものとして理解できるであろう。

さて、増田氏の考察に戻ろう。増田氏が基準とする対概念は、まとめにおいて次のように端的に示されている。

> このようにして主人公の光源氏には、その女性関係によくうかがわれるごとくに、古代的な性格を多分に担った人物として設定されている。したがって、その主人公によって展開される物語の世界もまた、多分に古代性をもっている。いま仮にここで「古代性」と呼んでいるものは、要するに人間性を形成している諸要素のうちのより基層的な部分、とでもいい替えることのできるものである。（略）男女関係の側面についていえば、物語の主人公としての源氏が、伊勢の昔男や交野の少将からうけ継いできた「色好み」という基層的な性格は、源氏にうけとめられた時には、空蟬との場合のように、女の生きる姿勢やその主体性の主張、相手の女性の外面性よりはその内面性や人間性にひかれるという新しい傾向を見せるところがある（三五一頁）。（傍点・廣田）

ここまで読み進めてくると、増田氏は、光源氏の「色好み」を否定しているわけではなく、「色好み」は光源氏の古代性であり、同時に基層的なものとして位置付けようとされているのだと分かる。増田氏が特徴的であることは、光源氏という「主人公」に「古代性」と「内面性」をみるところにある。

さらに増田氏は論考の末尾に「現実的な問題を提起しているところを、この物語の「近代性」と呼ぶ」のだと定義している（三五五頁）。

このように、増田氏の説かれるところを辿り直したのは、増田氏の考察の原理的な枠組みが、私がすでに論じ来たったところと、重なりつつずれているというところをひとまず整理しておきたいと考えたからである。

増田氏は、光源氏に「古代性と近代性」の関係をみてとろうとをみてとろうとする。なるほど光源氏は『源氏物語』そのものではあるといえなくもないが、人物論という分析方法の可能性と不可能性とを鑑（かんが）みれば、[4] 物語の「主人公」にではなく、物語の本文全体に、古代性と近代性をみようとすることができるだろう、というのが私の愚考するところである。

私がここで用いる近代性とは、「古代における近代性」の謂である。というのは、いつの時代にも、表現には前代的なものを下敷きにして、現在的なものを加え重ねてゆくという性質がある。つまり『源氏物語』の生成する現在において、古代は「古代の古代」と、「古代の近代」とが併存しているということである。

繰り返すが、私が増田氏と異なる点は、私はテキストそのものに重層性を見るところにある。古代性の中から近代性が孕まれてくるのではなく、同時に、古代性と近代性とは併存すると見ることである。

というのは、素朴に思いめぐらしてみれば、紫式部がいざ物語を書こうとするときに、彼女の知識や教養といった蓄積だけでは、絶対にこの『源氏物語』は描けない、と確信するからである。すなわち、物語を描くには、彼女の無意識、すなわち古代的な心性や感覚というものを排除することはできないからである。[5] そこに神話学や民俗学に学ぶべきことがあろう。

もともと言葉は、いつの時代にあっても、誰もが物心ついたとき、すでに言葉は自分の周りに溢（あふ）れるほど存在

し、盛んに用いられている。すなわち、「私」は幼いころ、口移しや見よう見まねで、言葉がどう使われてきたか、どう使うべきかを学ぶ。やがて教育を通じて、これまでにはなかった、厳密な言葉の選択と配置を学ぶ。それは、記憶というよりも、文脈 context の学習である。つまり、これまでにはなかった新たな組み換えを試みることで、新たな表現を発明することができる。このような仕組みこそ伝承そのものである。[6]

以上のように、私は、作者の意識／無意識の重層性と、物語本文の古層と新層、基層と表層といった重層性とは対応すると考える。

まわりくどいことを長々と述べてしまったが、およそ以下の小論は、このような対照軸のもとに愚考を重ねたものである。

注

（1）増田繁夫「古代的世界に生きる光源氏」『国文学』一九九三年五月、同「光源氏の古代性と近代性―内面性の深化の物語―」『源氏物語研究集成』第一巻（風間書房、一九九八年六月）。

（2）近時、「色好み」に触れる論考の中で興味深いものに、久下裕利「物語の回廊―色好み譚―」（『源氏物語と源氏物語以前　研究と資料』武蔵野書院、一九九四年）、長谷川政春「『源氏物語』〈いろごのみ〉の思想」（『源氏物語と文学思想　研究と資料』武蔵野書院、二〇〇六年）、高橋文二「光源氏の基層」（『駒沢国文』第四四号、二〇〇七年二月）などがある。

特に、長谷川氏の考察が興味深いことは、「色好み」の語の用例が、光源氏に対しては用いられていないにもかかわらず、逆に「色好み」は「光源氏に色濃く発している、あるいは光源氏が透けてみえる」とされることである。すなわち、

王権の体現者天皇に用いられることなく、その子である〈王子〉あるいはその類縁者にこそ用いられる」のであり、「天皇の〈うち〉なる者にしてそれから〈そと〉へ逸脱する存在である〈王子〉が「いろごのみ」の属性を内包する者としてあるゆえに、「いろごのみ」の行為者となってゆく。それが王権への犯しでなくてなんであろうか。まさに〈貴種流離譚〉である。

と論じておられることは注目される。言い換えれば、用例が逆に光源氏の「色好み」を照らし出しているという指摘は重要である。

（3）「新層／古層」「表層／基層」という二組の対概念について、私は『講義日本物語文学小史』（金壽堂出版、二〇〇九年）以来、『入門　説話比較の方法論』（勉誠出版、二〇一四年、四九八頁）などから、「文献説話の話型と表現の歴史性―対照軸としての昔話、昔話研究―」（同志社大学人文学会編『人文学』第一九九号、二〇一七年三月）に至るまで、テキストの基本的な分析方法として用いている。

（4）この問題については、本書第五章で少しばかり論じた。

（5）（4）に同じ。『源氏物語』を論じるのに、作者を持ち出すことに違和感をもつ向きもあろう。ただ、今まで何度か述べてきたように、『源氏物語』の展開を作者自身が介入したり、主導したりする側面を否定できないと私は考える。

（6）廣田收「民間説話と歴史性―神話と昔話、そして中世説話」（『伝承文学研究』第六六号、二〇一七年八月）。

第一章　『源氏物語』は誰のために書かれたか

――中宮学に向けて――